川崎市総合教育センター研究紀要14:267-272.2001

平成１２年度

言葉に力をつけていく
楽しい国語学習の創造

－読書を生活に根づかせる方法を探る－

川崎市総合教育センター　国語科研究会議

言葉に力をつけていく楽しい国語教室の創造

――読書を生活に根づかせる方法を探る ――

国語科研究会議
研修員　黒谷　祥子（川崎市立真福寺小学校）　須山　佳代子（川崎市立宮前小学校）
小林　格　（川崎市立田島中学校）　佐藤　由美　（川崎市立橘中学校）
研修指導主事　白井　理

Ⅰ 主題設定の理由

子どもたちに，言葉の力を身につけさせたい。そのためにどんなことが必要なのか。何ができるのか。私たちは，まず日々教室で感じていることを出し合い，自らの授業実践について話し合った。さまざまな取り組みが紹介され成果も表れていたが，話せない，聞けない，読めない，書けないという状況や歴然としてある学力差等が，課題として残った。そこで，私たちは「言葉に力をつける」（基礎基本の力が身につく，自分の考えを持ち表現できる，生活の中で生かせる，論理的な思考力が育つ，人間関係が育つ等）と同時に，子どもたちにとって魅力的な「楽しい」（進んで取り組める，意味や目的がある，認められる，達成感がある等）国語の授業を創り出すということを柱に研究を進めようとした。また，目の前の子どもたちから学習をつくることも大切にしようとした。

各領域や言語事項の中から，読むこと，とりわけ読書指導を選んだのは，読書が読みの力をつけるだけでなく，語彙力や文章力の育成，さらには感性を養うこと等，言葉に力をつけることに大変有効だと考えたからである。また，子ども一人一人の興味関心を生かした活動を組むことや，子ども同士の交流を大切にした活動を組むことができるので，子どもが楽しいと感じる国語の学習活動を展開していくことが可能であるとも考えた。以上のような理由から，主題を「言葉に力をつけていく楽しい国語教室の創造」，副題を「読書を生活に根づかせる方法を探る」とした。「読むことの究極的な目標は，一人一人の読書生活を豊かにすること」（森久保安美氏）と考え，読書指導，特に，読書生活につながる指導の在り方を探りたい。

Ⅱ 研究の内容

1．研究の方法

私たちは，子どもの読書生活の実状をふまえた授業実践を立ち上げたいと考え，子どもたちの実態を充分に話し合いながら学習方法を考えた。そのための具体的な資料とするために，読書アンケートを実施した。新学習指導要領に示される「読むこと」の新しい方向を授業を通して探るとともに，読書を生活に根づかせるための日常的な活動を実践することを意識して進めることにした。

2．アンケート「私の読書生活」から見える子どもの姿

（1）調査の目的

アンケート「私の読書生活」の第一の目的は，子どもの読書傾向や読書に対する意識を探ることにある。子どもはどんな本を好んで読んでいるのだろうか。もし読まないとすれば，理解力が不足しているから読めないのか，時間がないから読まないのか。それとも読みたいと思う本と出会う機会がないだけなのか。数々の疑問や私たちが日頃は漠然と認識していることをできるだけ明らかにし，読書単元の開発につなげていきたい。

また，これは指導者側から見れば「読書アンケート」であるが，同時に子どもの側から見れば「読

書カルテ」として使えるように項目が配慮されている。子どもが自分自身の読書生活を見直すことができ，読書の範囲を広げていこうとする意欲がもてるように意図されている。

（2）調査の方法

各研修員が担任または担当しているクラスで実施する。この調査はただ単に全体の傾向や意識を探るデータとしてではなく，一人一人をきめ細かく見取り，読書生活の向上につながる具体的な支援を行うことを目的としているためである。なお，アンケートは小・中学校共通であるが，小学校時代は自分で本を読む楽しさを味わっていたはずの子どもたちが，中学校では読書から遠ざかっているように見えることの理由を探るための項目を一部付け加えて実施している。

（3）小学校の結果から（6年生　40名実施）

①全体の傾向

子どもたちは本を読むことそのものは好んでいる。総合的な学習で調べるために本を読むというような目的的な読みを除けば，勉強の合間の気分転換や心の癒しを求めて本を手にしている子どもが多い。好んで読む本としては物語や小説を挙げる子どもが大多数だが，伝記・歴史・ノンフィクション・エッセイなどジャンルの広がりも見られる。

②本を読むことに抵抗がある子への手だて

1ヶ月の間にほとんど読まないと回答した2名の子は，読む力が不足しているために自力で読み通すことのできる本が限られていると考えられる。6年生だからと字の多い本を読むことを一律に要求するのではなく，教室に意識的に絵本や図鑑，「ズッコケシリーズ」などの子どもたちに人気の高いやさしい読み物を置くようにし，本を手にしやすい雰囲気作りを心がけた。最近は大人向けと思われる質の高い絵本も多数出版されているので積極的に紹介するようにした。保護者ボランティアによる読み聞かせも，絵本のよさを改めて子どもたちに感じ取らせる機会として有効であった。

③読みたい本が見つからない子への手だて

本を読むことが好きでもきらいでもない，と回答した14人の子どもに理由を聞いたところ「今はおもしろい本がない」「好みに合う本と合わない本があるから（本選びに失敗することがある）」など，読みたい本がなかなか見つからないという悩みを挙げていた。

逆にいろいろなジャンルの本を読み広げている子どもたちにどこでその本を知ったのかを尋ねたところ，「友だちにすすめられた」「書店や図書館で見かけた」「テレビで紹介していた」など，本の情報を得るための様々な手だてをもっていることがわかってきた。

最も効果的なのは口コミによる広がりである。心に残った本に8名が挙げていた「ハリーポッターと賢者の石」は，担任が紹介したところクラス内で評判になり，子ども同士で回し読みしていた本である。時には同じ作者の本をクラス全員で追いかけていくブームを仕掛ける，読書発表会を開いて子ども相互の情報交換を行うなど，子どもが読みたい本と出会うきっかけ作りを工夫するようにした。

④本を読む時間が少ない子どもへの手だて

週に1冊程度のペースで本を読んでいる子は23人で，この子どもたちはおそらく常に手元に本がある状態にあると見てよいだろう。残りの17人のうち、一日の中で本を手に取る時間が30分に満たないと回答しているのは10名であった。この子どもはたちは，本にふれる時間が不足していると考えられる。今後は，朝の10分間読書などを実施し，各自が読みたい本にひたって読むことのできる時間を保障し，みんながじっくりと本を読む環境を整えていくことで読書の習慣を形成していきたい。また，「一万ページ読書マラソンカード」を使って読んだページ数を記録していく方法は，子どもの読書意欲を高める，単純だが大変効果的な手だてである。

（4）中学校の結果から（1年生　39名実施）

①全体の傾向

特に最近，教室など学校の中で本を読む子どもの姿をあまり見かけない。「活字離れ」「本離れ」といわれることが多いが，本当にそうなのか。子どもたちが読書から遠ざかっているとすれば，その理由は何なのか。

本を読むことが「好き」と答えた子どもは12名，約4分の1である。残りの20名は「どちらでもない」，7名は「嫌い」と答えた。「嫌い」と答えた理由として，（a）難しい漢字・言葉が出てくると話の筋がわからなくなる（b）字を読むことがめんどうだ，ということを挙げている。ここから，それぞれ子どもの読む力に合った本，興味のある内容の本を紹介していくなどの手だてが効果的であるといえる。そうすることで本を読む機会が増えれば，活字から情報を得ることにも慣れ，読むことへの抵抗を少なくすることにつながっていくのではないか。

この1ヶ月1冊も本を読まなかったという子どもは，39名中26名であったが，その内訳は，読むことが「好き」と答えた子どもが5名，「どちらでもない」14名，「嫌い」7名，となっている。本を読まなかった理由として，本を読むことが「好き」「どちらでもない」子どもは，まず『時間が十分にない』ことを挙げている。放課後の部活動や塾通いなど自分で過ごし方を考えるゆとりの時間が減り，本を読んでみようという気持ちになかなかならないようである。また，小学生のころにくらべて本を読む時間がどう変わったかについては，「増えた」子どもは3名，「変わらない」が13名，「減った」が21名と，やはり「減った」と感じている子どもが多く，本を読むことが「好き」な子どもも7名含まれている。「減った」理由は，小学生のころにくらべて（a）図書室へいかなくなった（b）休み時間もやることが多いなど，放課後だけでなく学校生活の中でも本を手にとる時間が十分にはないことがわかる。読む時間が「増えた」とする子どもは，忙しい中でも（a）身近に本をすすめてくれる人がいる（b）家に本が増えたなど，日常生活で身近なところに本があり，本を手にとる機会も多いようだ。最近，先生以外の人から本をすすめられたことがある子どもは，11名（家族から9名・友達から2名）で，本を読むことが「嫌い」な7名の子どもはこの1ヶ月だれからも本をすすめられていない。しかし，本を読むことが「嫌い」である理由を，「特に読みたいと思わないから」としている子どももいるので，具体的にその子どもの興味に合った本を選んで，すすめるのも効果的である。

②本を手にとる意欲を湧き起こさせる手だて

中学生になって，放課後の部活動や塾通いなど生活が変化し，なかなか本を読む時間がとれない子どもが多い。しかし，アンケートの結果から身近に本をすすめてくれる人がいるほど読書の時間は増え，家や教室など自分の身近なところに興味がもてる本があれば，本を手にとることも増えるということがいえる。読む時間を意欲的につくり出そうとするほどの読書好きはいないが，読書そのものが「嫌い」な子どもはそれほど多くはない。それは，一度は本を読むことに夢中になった時期があったからであり，読書をする時間さえ与えられれば，読書を楽しむことができるということである。本を読む時間がとれない子どもにとって，授業の中でたくさんの良い本と出会うこと，本を手にしてみようかという気持ちになるような刺激を継続的にうけることが必要なのである。毎回の授業の始まりにお話のプリントを1枚配り，教師の朗読を聞くことを行っているが，教科書の中にない作品との出会いの場として子どもたちも楽しみにしており，紹介した作品と同じ作者が書いた作品を自分で読んでいる子どももいる。読書指導を豊かな読書生活につなげていくには，年間を通して，読書指導の計画を立て活動の形を変えながら，読むことの楽しさを思い出させ，実感させることができる授業の工夫が必要であることをあらためて感じた。

３．授業実践

（１）小学校における授業実践と成果　－単元「宮沢賢治の世界」から－

①単元について

宮沢賢治の作品は，一度はふれさせたい本の世界である。教科書には教材として「やまなし」がのっているが，「やまなし」だけでなく，「やまなし」をきっかけとして，宮沢賢治の作品をたくさん読み，さらに深く読み取ることで，賢治作品の世界に浸らせたい。

また，これまでの読みの技能や能力を生かした学習を展開し，イメージ豊かに読むことで，一人一人の読書生活が広がり，豊かになればと考える。

②単元の目標

◎進んで宮沢賢治のいろいろな作品を読もうとする。

○心に残った言葉や優れた描写の部分を視写して，自分なりの考えを書いたり話したりする。

○色彩語や擬音語・擬態語に着目し，その役割や効果について理解することができる。

③学習の流れ（13～15時間扱い）

	学習活動	教師の支援
出会う	１．順に出される本を見て，誰が書いた本か考え分かったところで手を挙げる。 ２．宮沢賢治の簡単な人物紹介を聞く。 ３．「やまなし」の読み聞かせを聞く。 ４．「やまなし」を読み味わう。	・宮沢賢治の本を10冊，知られていないものから順に提示し，興味を持たせる。 ・写真や資料を用意する。 ・十分に読む練習をし，読み聞かせをする。 ・ワークシートを用意する。
探る	１．読みたい宮沢賢治の本を読み，心に残ったところをワークシートに視写し，なぜそこが心に残ったのかそのわけも書く。 ２．２冊，３冊，４冊と各自のペースに合わせて読み進める。	・区立の図書館等を利用し，クラスの人数分以上の宮沢賢治の本を用意する。 ・わからない言葉の意味を教えたり，漢字の読み方を教えたりして，一人読みの手助けをする。
深める	１．「やまなし」「よだかの星」「虔十公園林」をグループごとに感想交流をする。 ２．わからなかったことなどを課題とし，話し合いながらグループでそれぞれの作品を読み深めていく。	・課題の持ち方，話し合いの進め方，読みの深め方等を机間巡視しながら声をかけていく。 ・ワークシートは，その都度集め，コメントを入れて返す。
表現する	１．「やまなし」「よだかの星」「虔十公園林」の中から一作品を選んで，紙芝居を作る。 ２．読む練習をし，縦割り班の下級生に聞いてもらう。	・絵が苦手な場合は，コピーやカーボン紙を利用するなどして，相談にのる。 ・工夫したところを見つけほめる。 ・音楽なども取り入れるように声をかける。

④実践を終えて

初めの投げかけで宮沢賢治に興味を持った子どもたちは，用意した本や家から持ってきた本を黙々と読み，心に残った場面やおもしろい表現方法と感じた箇所を視写した。この活動は，次のグループで読み深める時のとても良い耕しとなったのか，一斉授業ではなかなか意見の言えない子も，活発に話し合いに参加している姿を各グループで見かけた。また，グループでの読み深めは，同じ作品を読みながら，それぞれ違った視点や角度で作品を読み進めていくおもしろさがあった。一人の作者を追いかける読み方は初めての試みだったが，読書生活を豊かにする上で有効だった。

（2）中学校における授業実践と成果　―単元「映像と原作の世界に親しむ」から―

①単元について

日常生活の中で子どもが興味関心のあるものを活用し，そこからいかに読書へ導くかという点に重きをおいて，その新しい方法を探った。

具体的には，現代の生活の中からけっしてひき離すことができない，テレビをはじめとした映像メディアを利用して，ドラマや映画の世界から原作が読みたくなるような気持ちを起こさせることを念頭に，本との出会いを演出する読書指導の入口の工夫を試みた。

②単元の目標

◎映像を有効に取り入れていくことによって，原作への興味を引きだし，両方を合わせて鑑賞することの面白さを感じることができる。

○映像表現と文字表現の両方の特質にふれることにより，作品の世界をより深くとらえることができる。

③学習の流れ（5～7時間扱い）

	学習の流れ	支援（○）と評価（☆）
ふれる	・「注文の多い料理店」の鑑賞を映像→原作の順に行い，感想をまとめる。	○映像と原作を比べた時に，印象の違いを引き出しやすい作品を用意する。 ☆映像から興味を持って原作を読み，それぞれの作品から作者が伝えたかったことをまとめることができたか。
交える	・「注文の多い料理店」の映像と原作を比較し，表現方法が異なることによる，作品から受ける印象の違いについて　話し合う。	○比較する視点の具体例を挙げる。 ☆映像と原作の二つの作品を比較検討することで，より深く味わうことができたか。
広げる	・原作が映像化されている作品の目録づくりを行ったり，様々な作品の見所や差異についてまとめ，紹介を行う。	○作品のリストアップに関しては，教師側で行ってもよい。 ☆他の作品にも興味を持って取り組み，視野を広げることができたか。

④実践を終えて

映像と原作を利用してのアプローチの仕方は様々あると思うが，今回の感想だけをとってみても，読書意欲の向上につながるものがあることを実感した。映像文化の発達は読書の妨げになると心配されるが，映像を上手に提供し利用することによって，子どもに本を手にとってみたいという気持ちを持たせることができるだろう。最後に子どもの感想を載せたい。

「この作品を『観る』のと『読む』のでは少し違った印象を受けた。しかし，原作とビデオの二つを通して初めて本当に言いたいことが分かったような気がする。それぞれの作品が，逆に新鮮に感じたのは何か不思議な気分だった。」

Ⅲ　研究のまとめ

1．読書アンケートについて

子どもの読書への意識と実態を知る，よい契機となった。アンケートの結果から，「この子にこんな本と出会わせたい」という具体的なイメージをつかむことができ，支援に結びつけることができた。また，小・中学校共通のアンケートをとった結果，それぞれをとりまく読書環境や読書に対する意識の違いがわかり，読みを妨げている原因を知ることができた。中学校でアンケートに一部つけ加えた項目から，本は嫌いではないが読む時間がなかなか作れない子どもが多いことがわかり，授業の中で読書の楽しさを実感させるような活動，多くの本と出会う機会を積極的に設定していくことがいかに大切であるかを改めて感じた。今回は一度しかアンケートを実施できなかったが、「読書カルテ」としての意義を考えると，自分の読書生活を振り返る場として，学期に一回程度は実施していきたい。

2．授業実践から

読書を一人一人の生活の中に根づかせたいという思いから出発し，教科書教材をきっかけとしながら読書へと広げる単元，誰もが抵抗なく見ることのできる映像から読書へと広げる単元作りをし，実践を試みた。前者は小学校で，後者は中学校で行ってみた実践だが，どちらの単元もそれぞれの子どもたちの実態に合わせて計画さえ立てれば，小学校，中学校どちらで行ってもおもしろい学習活動となり，読書生活の裾野を広げることのできる実践といえる。今後さらに時間数が削減されていく国語科の中であっても，積極的に読書単元を開発し，実践していくことで読書好きな子どもを育てたい。

3．読書を生活に根づかせるために

子どもたちに時間を保障し，ゆったりと本に向かい合う機会をできるだけ多くしていくことが大切である。同時に，本の世界にじっくりひたることのできる場所を確保するなど，環境整備もすすめていきたい。子どもの心をゆさぶる価値ある本を見抜く目を鍛え，子どもの成長と要求に合った本を揃えていくことも必要である。

また，本についての情報を交換していくことが，読みたい気持ちを高め，読書の範囲を広げることにつながるので，読書会や掲示物で子ども同士が本を紹介し合うほか，ブックトークや読み聞かせで教師が積極的に本を紹介していくこともすすめていきたい。公共図書館との連携も図っていきたい。

4．「調べる読書」の視点から

楽しむための読書だけでなく，情報活用としての図書利用も同時にすすめていきたい。事典，図鑑などの調べ方を身につけるための学習や，映像，新聞，雑誌，インターネットなどの情報源を活用していく授業実践を積み重ねていきたい。

最後に，本研究会議を懇切にご指導して下さった森久保安美先生をはじめ，貴重なご指導やご助言を下さった多くの先生方，ご支援下さった当該校の教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

兼田　由利子（川崎市立南野川小学校）「読書の楽しさを子どもたちのために」
第23回関東地区図書館研究大会」厚木大会　資料　1995年
吉田　喜恵子（川崎市立大谷戸小学校）「自ら学ぶ力と　心豊かな子どもを育てる情報教育めざして」
平成10年度東部地区学校図書館フォーラム資料　1998年
スティーブン・クラッシェン『読書はパワー』金の星社　2000年

【指導助言者】

産能大学名誉教授（川崎市総合教育センター専門員）　森久保　安美